

チルチンびと

—— 薪ストーブ生活を始めたい人、もっと楽しみたい人へ ——

薪ストーブ年鑑

2017

—— 料理家・細川亜衣さん

毎日の料理を支えるクッキングストーブ

—— アトリエ線路脇

三人の作家を照らす薪ストーブの炎

選び方、メンテナンス、薪のつくり方など
薪ストーブの基礎知識

全97機種一挙掲載！

最新 薪ストーブ & グッズカタログ

土間リビングとダイニングがゆるくつながる
1階。土間と薪ストーブ背後の石には、きめ
細かい肌が特徴の十和田石を用いた。

工務店が建てる
薪ストーブのある家
House with Wood Stoves

千葉県 (株)グッドリビング どんぐりの家 千葉県野田市・首藤邸

家中をぬくもりで包む 土間リビングの薪ストーブ

「薪ストーブを楽しむための家が欲しかった」と話す首藤さん夫妻。
自然素材にこだわる地元工務店とともに、
火が身近にある暮らしと、住むほどに愛着が増す家づくりを実現した。

写真=川辺 明伸 文=林 菜穂子



右／薪ストーブはヨツールF3。サイズは設計担当と相談して決めた。左／首藤邸外観。薪は近所の庭木屋さんが無料でくれるそう。近々薪棚をつくる予定。

薪ストーブに一目惚れ

千葉県野田市の緑豊かな住宅街に建つ首藤邸。家の周りに積み上げられた薪と屋根から伸びる煙突が、周囲の自然に映える。玄関を開けると、広々とした土間リビングと、そこに置かれた薪ストーブの暖かな炎に迎えられた。土間の奥は上がり框でダイニングキッチンにつながり、吹き抜けが1階、2階、ロフトを一つの空間につなげている。

憲久さん・明子さん夫妻が家づくりにあたって理想としたのは、月日を重ねるほどに愛しさが増す家だった。「意外かもしれないが、着想の源は20年愛用している革のブーツ。風格が出て新品よりもはるかに格好いいんです。そんな、人生の相棒となるような家をつくりたかったのです」と憲久さんは語る。

家づくりのパートナーに地元の工務店・どんぐりの家を選んだのは、同社のモデルルームを訪れたことがきっかけだった。「モデルルームで初めて自然素材に触れたのですが、無垢材の床や漆喰の壁が、時を経て古く廃れるのではなく、味わいを増していくところに強く惹かれました。構造計算を専門とする設計士がプランを立ててくれるため、丈夫で長持ちする家を実現できる点

上右／桁の一枚板のテーブルは、この家に合わせて岐阜の家具職人につくってもらったもの。
上左／漆喰の壁にはワラ・スサを通常の3倍ほど入れ、豊かな表情を持たせた。 中／土間とダイニングの段差部分に間接照明を仕込んだのは、憲久さんのアイデア。夜、薪ストーブの炎と間接照明だけで過ごす時間は格別だという。 下／杉の大黒柱。「経年変化で深い色味になるのが楽しみ」と夫妻。



夫妻が家づくりにあたって出した要望は、家中暖かいことと、薪ストーブを楽しむ土

季節が変わったような暖かさ

も魅力でした」と夫妻は振り返る。
薪ストーブに一目惚れしたのも、モデルルーム訪問時だった。「クラシカルな薪ストーブがあって、自然素材と見事に調和するさまに心を奪われました。何十年も使い込んでいけるのも素敵だと思いました」と明子さん。一方で憲久さんは、薪ストーブを見て子どもの頃の記憶が蘇ったと話す。「小学生の頃住んでいた家に薪焚きのお風呂があって、風呂を焚く係だったのです。僕は火を操るのが楽しくて仕方なくて、自分なりに工夫をしてかなり上手くなった。大人になって炎は日常から遠ざかっていたのですが、家の中に生火がある暮らしの高揚感を、再び味わいたいと思いました」。

吹き抜けから1階を見下ろす。薪ストーブに合わせて購入したギャッベの絨毯の上は、明子さんのお気に入りの場所。





上／薪ストーブの前でくつろぐ夫妻。「炎はずっと見ていても飽きることがない」と声を揃える。 中／首藤さん夫妻と、どんぐりの家の川村一雄社長（左）。川村社長は「自然素材には熱を蓄えてくれる効果もあります」と話す。 下／薪割りは、休みの日に集中して行う。「気分がスッキリします」と憲久さん。



建築データ

家族構成：夫婦＋子ども2人
所在地：千葉県野田市
敷地面積：137.45㎡
延床面積：108.19㎡(1階 57.96㎡ 2階 50.23㎡)
竣工：2016年12月(工期2016年7月～12月)
施工：(株)グッドリビング どんぐりの家 ☎0120-234-934

構造形式：木造軸組在来工法 地上2階建
主な外部仕上げ：
屋根＝ガルバリウム銅板 厚0.4mm
外壁＝上部／ガルバリウム銅板
下部／サイディング下地 ベルアート仕上げ
主な内部仕上げ：
天井＝漆喰仕上げ
壁＝漆喰仕上げ
床＝杉板 厚30mm

STOVE DATA

- 機種名：
ヨツールF3
- 選択の理由：
料理ができること。クラシックなデザイン。
- タイムスケジュール：
平日：起きてすぐ(6時半頃)と
帰宅後(18時頃)の2回火を入れる。
休日：薪を足しながら1日中運転。
- 年間スケジュール：
シーズンスタート／11月頃
シーズンオフ／3月頃
メンテナンス／1年目なのでまだしていない。
年1回予定。
- 炉台の素材：十和田石
- 燃料：薪(ナラ・サクラなど)
- 入手方法：
近所の庭木屋さんが剪定した廃材を無料で
もらう。今後は、友人と一緒に筑波の
里山に伐採しにいく予定あり。

2階のすのこ廊下から居室を見る。左に一つ、奥に二つ部屋があり、手前側はバルコニーに通じている。障子の窓や漆喰の壁が、心落ち着く和のテイストを醸し出す。



2階の居室。プライバシーは確保しつつも、壁上部に隙間を設けることや吹き抜けに面した窓をつくることで、空気の流れを遮らないつくりになっている。どの部屋にいても同じように暖かい。

間リビングをつくることだった。憲久さんは「家づくりというより、薪ストーブを楽しむことが目的になっていましたね」と笑う。土間リビングにしたのは、家の中でも外とのつながりを感じたかったのと、玄関を入ってすぐ暖かい家にしたかったためだ。設計担当はこれを受け、全フロアをつなぐ吹き抜け、2階のすのこ廊下など、空気が自然に循環するプランを提案した。また、床には紀州杉、壁にはワラ・ササを多めに入れた漆喰を用い、自然素材の温もりを満喫できる空間をつくりあげた。

首藤邸の竣工は真冬だったため、入居後すぐに薪ストーブが活躍したが、夫妻はその暖かさに感動したという。「まるで季節が変わったような暖かさ! 外は真冬でも、家の中は春になったようなのです。さらに、ここは暑すぎる、あつちは寒すぎるということがなく、本当に家中隅々までばかばかなんです」と二人は声を揃える。

夫妻には大学生の息子さんと中学生の娘さんがいるが、薪ストーブは団欒の形も大きく変えた。「薪ストーブの周りに自然と家族が集まって、炎を眺めながらその日の出来事を話す時間が生まれました」と明子さんは話す。20歳の息子さんは薪づくりに夢中で、よく憲久さんと一緒に庭で作業をするそうだ。「どちらかというとインドア派だったのですが、今では2時間くらい平

遊び心があるロフトスペースは、中学生の娘さんのお気に入り。友達が泊まりにくると、布団を持ち込んで寝ているそう。



気でチェーンソーを使っています。父子のコミュニケーションが増えたことと、息子の新たな一面を発見できたことは、薪ストーブの恩恵ですね(憲久さん)。

一緒に年をとるのが楽しみな家と薪ストーブのぬくもりを手に入れた首藤さん一家。「家族全員料理好きなので、パンづくりや煮込みなどの薪ストーブ料理にも挑戦したい」と、楽しみは尽きない様子だ。